

眼底鏡の各部の解説

百聞は一見にしかず、各部の名称と役割をみてみよう（図1）。ここで細かいことではあるが、スイッチについて一言述べておきたい。各メーカーの各機種によっても若干の違いはあるが、大切なことは共通している。練習時や検査時に、必要がなければ「スイッチをすぐに切る！」ということである。初学者の多くが、夢中になっ

て練習をしていたりすると、診ていないときでもスイッチを切ることを忘れて、つけ放したままにしている。このタイプの眼底鏡は充電式のものが多いので、その間電池が無駄に消費されてしまうし、眼底鏡本体が熱を持ち、熱さのために続けて検査ができなくなってしまうことがある。



被検者側

- 観察孔 (ここから光が出る)
- フィルタ選択スイッチ
 - : 赤色を除去し、血管、出血などの異常所見を鮮明化する
 - ⊗: 反射を抑える
 - : 通常使用する
- アバーチャー (フィルタ) 選択ダイヤル (参考資料を参照)
- スイッチおよび光量調節 (押さえながら時計方向に回す →スイッチONの後、光量増大)

図1 直像検眼鏡



検査側



自分の右眼で相手の右眼を見る場合



自分の左眼で相手の左眼を見る場合

★ポイント···
人差し指で視度調節ダイヤルを調節しても眼底鏡が揺れないように、ハンドル部分をしっかりと保持し固定する。

図2 眼底鏡の持ち方

ハンドル部分を握ってみよう

相手の右眼を診るときには、自分の右手で眼底鏡を保持して自分の右眼で観察し、相手の左眼を診るときには、自分の左手で眼底鏡を保持して自分の左眼で観察する（図2）。いずれの手で保持した場合でも、視度調節ダイヤルを回したときに眼底鏡の軸がぶれないように、眼底鏡の柄の部分（ハンドルと呼ばれる）を片手でしっかりと保持することが大切である。人差し指はダイヤルが一つでも回せるように、常にダイヤル部分に添えておく。

○観察孔からのぞいてみよう

スイッチを入れたら、のぞき孔を通してのぞいてみよう。眼鏡ははずして使用する。このとき大切なことは、眼底鏡を保持した手を自分の頬部に、さらには眼底鏡上部の眉当て部分を自分の眉部に密着させ、視度調節ダイヤルを回しても眼底鏡がぶれないように、2箇所で自分の顔面にしっかりと固定することである（図3）。右眼だけでなく、左眼でも同じように安定した操作ができるようにしたい（このときは左手で眼底鏡を保持する）。



図3 眼底鏡を自分の顔面に固定

★ポイント
右手は自分の頬部に、眼底鏡の眉当ての部分は眉部に密着させ、眼底鏡がぶれないように2箇所で完全に固定する。



腕時計を使用



手掌の溝を使用

図4 自分の視力に合わせて視度調節ダイヤルを調節



緑色の数字（凸レンズの度数）が変化



赤色の数字（凹レンズの度数）が変化

図5 レンズ度表示窓の数字

○自分の視力に合わせて調節してみよう

眼底鏡を通して、30 cmほど先の自分の手掌の線や腕時計の文字盤などを見て、一番はっきりと見えるところまで視度調節ダイヤルを回し、自分の視力に合わせる（図4）。ダイヤルを時計回りに回すと凸レンズ（遠視用）、反時計回りに回すと凹レンズ（近視用）の度数が強くなっていく。このとき眼底鏡のレンズ度表示窓にレンズの度数が表示されるが、凸レンズの度数（+）は緑色の数字で表され、凹レンズの度数（-）は赤色の数字で表される（図5）。

眼底鏡を使用するたびに毎回合わせる必要がないように、いつたん自分の視力にレンズを合わせたら、そのときのレンズ度表示窓の数字を覚えておくとよい。